

小・中・高等学校における冬季野外活動（スキー）の実態

——本学学生の質問調査結果から——

渡邊 陵由・平塚 和也・工藤 祐太郎・三本木 温

要旨

本研究は、大学生を対象に、小学校、中学校、高等学校において冬季野外活動であるスキー教室・実習においてどのような授業が行われているのかをあきらかとすることを目的とし質問調査を行った。本学人間健康学科に所属する学生 86 名を対象に質問調査を行った。回答者は、小学校、中学校、高等学校ともに青森県の者が最も多く、次いで北海道、岩手県、秋田県の順であり回答者の 75%以上を占めていた。主な結果として、小学校、中学校、高等学校で行われたスキー授業の多くは日帰りでの実施であり、その多くは近郊のスキー場にて実施されていた。また、校種が小学校、中学校、高等学校と上がるにつれ、指導を行う者の割合は、教員や地域の方が減少し、スキー場のインストラクターの割合が増加した。指導の内容は小学校、中学校、高等学校ともにスキーの脱着方法、スキーを履いた状態での移動方法や転び方・起き方、プルークボーゲンへの指導が展開されていることが明らかになった。また、経験者に対してはパラレルターンへの指導といったより発展された内容が行われていると考えられる。

キーワード：スキー 学校体育 質問調査

1. はじめに

日本国内の学校教育において、冬季の野外活動としてスキーが行われている。文部科学省により平成 29 年に告示された小学校学習指導要領¹⁾では、第 9 節体育の第 3 指導計画の作成と内容の取扱いにおいて、「自然との関わりの深い雪遊び、氷上遊び、スキー、スケート、水辺活動などの指導については、学校や地域の実態に応じて積極的に行うことに留意すること。」とされている。また、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説の体育編²⁾において、「諸条件の整っている学校に対して、自然との関わりの深い運動の指導を奨励していることを示したものである。」と記載されている。平成 29 年に告示された中学校学習指導要領³⁾

では、第 7 節保健体育の体育分野における内容の取扱いにおいて、「自然との関わりの深いスキー、スケートや水辺活動などの指導については、学校や地域の実態に応じて積極的に行うことに留意するものとする。」とされ、中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説⁴⁾の保健体育編、各分野の目標及び内容において、「自然の中での遊びなどの体験が不足しているなど、現在の生徒を取り巻く社会環境の中では、自然との関わりを深める教育が大切であることから、諸条件の整っている学校において、スキー、スケートや水辺活動など、自然との関わりの深い活動を積極的に奨励しようとするものである。」、指導計画の作成において、「体育分野においては、体育分野で学習し

た成果を、教科外の活動や学校や地域の実態等に応じた活動などの学校教育活動に生かすことができるよう、本解説第2章の第2節[体育分野]の3(4)に示された「自然との関わりの深いスキー、スケートや水辺活動など」の指導を積極的に取り入れるとともに、年間指導計画において、学習の時期や順序を検討するなど、結果として体験活動の充実に資することに留意することが必要である。」と記載されている。

平成30年告示の高等学校学習指導要領⁵⁾においては、体育における内容の取扱いに「自然との関わりの深いスキー、スケートや水辺活動などの指導については、学校や地域の実態に応じて積極的に行うことに留意するものとする。」とされ、高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説⁶⁾の保健体育編体育編の4内容の取扱いにおいて、「自然の中での遊びなどの体験が不足しているなど、現在の生徒を取り巻く社会環境の中では、自然との関わりを深める教育が大切であることから、諸条件の整っている学校において、スキー、スケートや水辺活動など、自然とのかかわりの深い活動を積極的に奨励しようとするものである。」、内容の取扱いに当たっての配慮事項には「科目体育においては、体育で学習した成果を、教科外の活動や学校や地域の実態等に応じた活動などの学校教育活動に生かすことができるよう、本解説第2章第2節「体育」4(4)に示した「自然との関わりの深いスキー、スケートや水辺活動など」の指導を積極的に取り入れるとともに、年間指導計画において、学習の時期や順序を検討するなど、結果として体験活動の充実に資することに留意することが必要である。」と記載され、いずれの校種においてもスキーは領域として定められていないため、必ずしも実施する必要は無いが、現在の児童・生徒は自然の中での体験活動が少ないため、各学校の実態に応じて積極的に活動することが推奨されている。

本学が所在する県は寒冷地であり、降雪量が多い地域もあるため、小学校、中学校、高等学校においては冬季に行事としてスキー教室・実習などの野外活動を行っていると考えられるが、その実態に関する報告は見当たらない。また、国内において学校におけるスキー教室・実習の実態について報告されている研究は散見されるが⁷⁾⁸⁾、具体的な実技内容に踏み込んだ調査は見当たらない。

本学は中学・高等学校の保健体育教諭免許を取得でき、北海道・東北といった寒冷地域出身の者も多く在籍するため、冬季野外活動(スキー)において実際に小学校、中学校、高等学校時代にどのような授業が行われたかを把握することで、今後の授業づくり、および教員養成における冬季野外活動(スキー)の授業における基礎資料となりうると考える。

そこで本研究では、大学生を対象に、小学校、中学校、高等学校において冬季野外活動であるスキー教室・実習においてどのような授業が行われているのかを明らかにすることを目的とする。このことで中学校・高等学校の保健体育教員を目指す学生を指導する上での基礎資料となり、これからのスキー授業の実践を行う上での資料となりうると考える。

2. 方法

2-1. 調査時期および対象者

2024年12月に本学人間健康学科に所属する学生86名(1年生24名,2年生26名,3年生20名,4年生16名,男性64.0%,女生36.0%)に調査を行った。対象者には研究の意義、目的及び内容について書面にて説明を行い、同意を得た。

2-2. データの収集

本研究では、Google formを用いた質問調査によってデータ収集を実施した。対象者の自由意思を尊重するため、本質問調査は無記名により実施されること、個人を特定し公表さ

ることがないこと、回収したデータは本研究の目的以外では使用しないことを書面にて伝え、同意が得られた者のみが本質問調査に回答できるようにした。

2-3. 質問調査の内容

質問調査の内容は、性別、学年、取得を希望する教員免許、出身小学校、中学校、高等学校の所在地（県、市町村）、スキーの開始年齢、小学校、中学校、高校校時代の野外活動（スキー教室・実習）の授業の有無、授業があった場合は授業の実施場所、小学校、中学校、高校校時代にスキー教室・実習が行われた際の指導者、スキー教室・実習は宿泊を伴うものか否か、宿泊を伴うものであった場合の宿泊数、小学生、中学生、高校生時代のスキーの授業の内容について調査を行った。野外活動（スキー教室・実習）の授業の有無、スキー教室・実習の指導者、スキー教室・実習は宿泊を伴うものか否か、および宿泊数、授業の内容については各校種ごとに質問をした。スキー教室・実習の指導者については、「教員」、「スキー場のインストラクター」、「地域の方」、「その他（選択の場合は記述）」から選択（複数選択可）させた。スキー教室・実習における授業の内容については、日本スキー教程⁹⁾、および札幌市スキー学習の手引き¹⁰⁾を参考に、「ブーツでの歩き方」、「スキーを抱えて歩く」、「スキーを担いで歩く」、「スキーの履き方」、「スキーの外し方」、「ストックの握り方」、「片足スキーで歩く」、「片足スキーで滑らせる」、「スキーで歩く」、「すり足で進む」、「平地で推進滑走」、「トップを支点に方向転換」、「テールを支点に方向転換」、「キックターン」、「その場でハの字（プルークスタンス）の練習」、「階段登行」、「開脚（V字）登行」、「転び方・起き方」、「直滑降」、「プルークファーレン」、「直滑降からプルーク（ハの字）」、「直滑降からプルークの連続」、「プルークファーレンから片足を開いて停止」、「プルークボーゲン」、「プルークボーゲン大回り」、

「プルークボーゲン小回り」、「滑走プルーク」、「斜滑降」、「横滑り（斜め前）」、「横滑り（真下）」、「シュテムボーゲン」、「シュテムターン」、「パラレルターン大回り」、「パラレルターン小回り」の34項目とした。34項目以外でスキー教室・実習で行ったことがあった場合は、次の項目で行った内容を記入させた。

2-4. 統計処理

取得を希望する教員免許、学校の所在地（県）、スキー教室・実習の日数、スキー教室・実習時の指導者、スキー教室・実習時の実技内容については全回答数に対する各項目の人数とその割合を算出した。また、スキーの開始年齢の項目においては、実際の年齢を記入する者と、小学校、中学校などと学校種を記入する者がいたため、本研究においては、6歳以下を就学前、7～12歳を小学生、13～15歳を中学生、16～18歳を高校生と分類し、その人数と割合を算出した。

3. 結果

3-1. 取得希望教員免許の内訳

表1に対象者が取得を希望する教員免許の種類について示した。小学校、中学校（保健体育）、高等学校（保健体育）を希望する者が4名（4.7%）、中学校（保健体育）、高等学校（保健体育）を希望する者が41名（47.7%）、中学校（保健体育）のみを希望する者が5名（5.8%）、高等学校（保健体育）のみを希望する者が28名（32.6%）、養護教諭を希望する者が8名（9.3%）であった。

表1 取得を希望する教員免許の種類

希望免許	人数	割合
小学校・中・高（保体）	4	4.7%
中・高（保体）	41	47.7%
中学校（保体）	5	5.8%
高等学校（保体）	28	32.6%
養護教諭	8	9.3%

3-2. スキーの開始校種

表 2 にスキーの開始校種を示した。回答した者のうち（回答率 55.8%），就学前が 4 名（8.3%），小学校が 30 名（62.5%），中学校が 5 名（10.4%），高等学校が 9 名（18.8%）であった。

表2 スキーの開始校種

	人数	割合
就学前	4	8.3%
小学校	30	62.5%
中学校	5	10.4%
高等学校	9	18.8%

3-3. 小学校における冬季野外活動（スキー）の実態

出身小学校の所在地（県）及びスキー教室・実習実施について表 3 に示した。出身小学校が北海道・東北であった者は 75 名（87.2%）であった。北海道の者は 5 名（41.7%），北東北では青森県の者は 10 名（23.8%），岩手県の者は 5 名（55.6%），秋田県の者は 1 名（16.7%）がスキー教室・実習を行ったと回答した。また，東北以外の者は 3 名（27.3%）がスキー教室・実習を行ったと回答した。小学校全体では，27 名（31.4%）がスキー教室・実習を行ったと回答した。

小学校で行われたスキー教室・実習の実施日数は（表 4），日帰りが 26 名（96.3%），1 泊が 1 名（3.7%）であった。

小学校のスキー教室・実習時にかかわった指導者は（表 5），教員が 18 名（66.7%），インストラクターが 14 名（51.9%），地域の方（保護者を含む）が 11 名（40.7%）であった。また，教員のみが指導を行ったのは 5 名（18.5%），インストラクターのみが 5 名（18.5%），地域の方のみが 2 名（7.4%）であり，教員とインストラクター，および教員と地域の方が 5 名（18.5%），

教員とインストラクター，地域の方がかかわった場合が 3 名（11.1%）と教員がかかわる割合が一番多い結果となった。

小学校のスキー教室・実習で指導された内容は（表 6），スキーの外し方，平地で推進滑走，転び方・起き方が最も多く 24 名（88.9%）であった。次に多かった回答は，スキーの履き方，階段登行で 23 名（85.2%）であった。また，スキーで歩く，プルークファーレンが 22 名

表3 小学校の所在県及びスキー実施割合

	人数	回答割合	実施数	実施割合
北海道	12	14.0%	5	41.7%
青森県	42	48.8%	10	23.8%
岩手県	9	10.5%	5	55.6%
秋田県	6	7.0%	1	16.7%
宮城県	2	2.3%	1	50.0%
山形県	2	2.3%	2	100.0%
福島県	2	2.3%	0	0.0%
その他	11	12.8%	3	27.3%
合計	86	100.0%	27	31.4%

表4 小学校における実施日数

日数	人数	割合
日帰り	26	96.3%
1泊	1	3.7%

表5 小学校におけるスキーの指導者の割合

指導者	人数	割合
教員	18	66.7%
インストラクター	14	51.9%
地域・保護者	11	40.7%
忘れた	1	3.7%
教員	5	18.5%
インストラクター	5	18.5%
地域の方	2	7.4%
教員・インストラクター	5	18.5%
教員・地域の方	5	18.5%
教員・インストラクター・地域の方	3	11.1%
インストラクター・地域の方	1	3.7%
覚えていない	1	3.7%

表6 小学校におけるスキースキの指導の内容

指導内容	人数	割合
ブーツでの歩き方	18	66.7%
スキーを抱えて歩く	20	74.1%
スキーを担いで歩く	7	25.9%
スキーの履き方	23	85.2%
スキーの外し方	24	88.9%
ストックの握り方	21	77.8%
片足スキーで歩く	11	40.7%
片足スキーで滑らせる	11	40.7%
スキーで歩く	22	81.5%
すり足で進む	18	66.7%
平地で推進滑走	24	88.9%
トップを支点に方向転換	15	55.6%
テールを支点に方向転換	11	40.7%
キックターン	14	51.9%
その場でハの字（ブルークスタンス）の練習	19	70.4%
階段登行	23	85.2%
開脚（V字）登行	16	59.3%
転び方・起き方	24	88.9%
直滑降	19	70.4%
ブルークファーレン	22	81.5%
直滑降からブルーク（ハの字）	18	66.7%
直滑降からブルークの連続	18	66.7%
ブルークファーレンから片足を開いて停止	17	63.0%
ブルークボーゲン	17	63.0%
ブルークボーゲン大回り	18	66.7%
ブルークボーゲン小回り	13	48.1%
滑走ブルーク	12	44.4%
斜滑降	12	44.4%
横滑り（斜め前）	8	29.6%
横滑り（真下）	12	44.4%
シュテムボーゲン	11	40.7%
シュテムターン	11	40.7%
パラレルターン大回り	8	29.6%
パラレルターン小回り	7	25.9%

（81.5%）と多く、スキーを担いで歩く、パラレルターン小回りが7名（25.9%）、横滑り（斜め前）、パラレルターン大回りが8名（29.6%）と少ない結果となった。

3-4. 中学校における冬季野外活動（スキー）の実態

出身中学校の所在地（県）及びスキー教室・実習実施について表7に示した。出身中学校が北海道・東北であった者は75名（87.2%）であった。北海道の者は5名（41.7%）、北東北では青森県の者は3名（7.1%）がスキー教室・実習を行ったと回答したが、岩手県、秋田県の者でスキー教室・実習を行ったと回答した者はいなかった。また、東北以外の者は3名（27.3%）がスキー教室・実習を行ったと回答した。中学校全体では、11名（12.8%）がスキー教室・実習を行ったと回答した。

中学校で行われたスキー教室・実習の実施日数は（表8）、日帰りが9名（81.8%）、宿泊

表7 中学校の所在県及びスキー実施割合

	人数	回答割合	実施数	実施割合
北海道	12	14.0%	5	41.7%
青森県	42	48.8%	3	7.1%
岩手県	9	10.5%	0	0.0%
秋田県	6	7.0%	0	0.0%
宮城県	2	2.3%	0	0.0%
山形県	2	2.3%	0	0.0%
福島県	2	2.3%	0	0.0%
その他	11	12.8%	3	27.3%
合計	86	100%	11	12.8%

表8 中学校における実施日数

日数	人数	割合
日帰り	9	81.8%
宿泊した	2	18.2%
内訳 1泊	1	9.1%
2泊	1	9.1%

表9 中学校におけるスキーの指導者の割合

指導者	人数	割合
教員	7	63.6%
インストラクター	8	72.7%
地域の方	1	9.1%
教員	3	27.3%
インストラクター	4	36.4%
地域の方	0	0.0%
教員・インストラクター	3	27.3%
教員・地域の方	0	0.0%
教員・インストラクター・地域の方	1	9.1%
インストラクター・地域の方	0	0.0%

した者は2名(18.2%) (内訳1泊が1名(9.1%), 2泊が1名(9.1%))であった。

中学校のスキー教室・実習時にかかわった指導者は(表9), 教員が7名(63.6%), インストラクターが8名(72.7%), 地域の方が1名(9.1%)であった。また, 教員のみが指導を行ったのは3名(27.3%), インストラクターのみが4名(36.4%), 地域の方のみと回答した者はいなかった。教員とインストラクターは3名(27.3%), 教員とインストラクター, 地域の方がかかわった場合が1名(9.1%)とインストラクターがかかわる割合が一番多い結果となった。

中学校のスキー教室・実習で指導された内容は(表10), 転び方・起き方, ブルークファーレンが8名(72.7%), と最も多く, 次いでスキーの履き方, 直滑降からブルーク(ハの字), ブルークボーゲン大回りが7名(63.6%), スキーの外し方, その場でハの字(ブルークスタンス)の練習, 階段登行, ブルークファーレンから片足を開いて停止, ブルークボーゲン小回りが6名(54.5%)となった。スキーを抱えて歩くは2名(18.2%)となり, 最も少ない結果となった。

表10 中学校におけるスキーの指導の内容

指導内容	人数	割合
ブーツでの歩き方	3	27.3%
スキーを抱えて歩く	2	18.2%
スキーを担いで歩く	4	36.4%
スキーの履き方	7	63.6%
スキーの外し方	6	54.5%
ストックの握り方	5	45.5%
片足スキーで歩く	4	36.4%
片足スキーで滑らせる	4	36.4%
スキーで歩く	5	45.5%
すり足で進む	4	36.4%
平地で推進滑走	4	36.4%
トップを支点に方向転換	5	45.5%
テールを支点に方向転換	5	45.5%
キックターン	3	27.3%
その場でハの字(ブルークスタンス)の練習	6	54.5%
階段登行	6	54.5%
開脚(V字)登行	5	45.5%
転び方・起き方	8	72.7%
直滑降	4	36.4%
ブルークファーレン	8	72.7%
直滑降からブルーク(ハの字)	7	63.6%
直滑降からブルークの連続	5	45.5%
ブルークファーレンから片足を開いて停止	6	54.5%
ブルークボーゲン	5	45.5%
ブルークボーゲン大回り	7	63.6%
ブルークボーゲン小回り	6	54.5%
滑走ブルーク	4	36.4%
斜滑降	4	36.4%
横滑り(斜め前)	4	36.4%
横滑り(真下)	5	45.5%
シュテムボーゲン	5	45.5%
シュテムターン	5	45.5%
パラレルターン大回り	5	45.5%
パラレルターン小回り	5	45.5%

3-5. 高等学校における冬季野外活動（スキー）の実態

出身高等学校の所在地（県）及びスキー教室・実習実施について表 11 に示した。出身高等学校が北海道・東北であった者は 75 名（87.2%）であった。北海道の者は 4 名（33.3%），北東北では青森県の者は 12 名（30.0%）がスキー教室・実習を行ったと回答したが，岩手県，秋田県の者はスキー教室・実習を行ったと回答した者はいなかった。また，東北以外の者は 2 名（18.2%）がスキー教室・実習を行ったと回答した。高等学校全体では，21 名（24.4%）がスキー教室・実習を行ったと回答した。

高等学校で行われたスキー教室・実習の実施日数は（表 12），日帰りが 17 名（81.0%），宿泊した者は 4 名（19.0%）（内訳 1 泊が 1 名（4.8%），2 泊が 1 名（4.8%），3 泊が 2 名（9.5%））であった。

高等学校のスキー教室・実習時にかかわった指導者は（表 13），教員が 9 名（42.9%），インストラクターが 16 名（76.2%），地域の方（保護者を含む）が 2 名（9.5%）であった。また，教員のみが指導を行ったのは 2 名（9.5%），インストラクターのみが 9 名（42.9%），地域の方のみと回答した者はいなかった。教員とインストラクターは 6 名（28.6%），教員と地域の方は 1 名（4.8%），インストラクターと地域の方がかかわった場合が 1 名（9.1%）とインストラクターがかかわる割合が一番多い結果となった。

高等学校のスキー教室・実習で指導された内容は（表 14），スキーの履き方，スキーの外し方，プルークファーレンが 13 名（61.9%）と最も多く，次いでブーツでの歩き方，スキーで歩く，直滑降からプルーク（ハの字）が 12 名（57.1%），すり足で進む，平地で推進滑走，その場でハの字（プルークスタンス）の練習，直滑降が 11 名（52.4%）であった。また，最も行われていない実技内容は，横滑り（斜め前）で 3 名（14.3%）という結果となった。

表 11 高等学校の所在県及びスキー実施割合

	人数	回答割合	実施数	実施割合%
北海道	12	14.0%	4	33.3%
青森県	40	46.5%	12	30.0%
岩手県	9	10.5%	0	0.0%
秋田県	6	7.0%	0	0.0%
宮城県	3	3.5%	3	100.0%
山形県	2	2.3%	0	0.0%
福島県	3	3.5%	0	0.0%
その他	11	12.8%	2	18.2%
合計	86	100.0%	21	24.4%

表 12 高等学校における実施日数

日数	人数	割合
日帰り	17	81.0%
宿泊した	4	19.0%
内訳 1泊	1	4.8%
2泊	1	4.8%
3泊	2	9.5%

表 13 高等学校のスキーの指導者の割合

指導者	人数	割合
教員	9	42.9%
インストラクター	16	76.2%
地域の方	2	9.5%
わからない	2	9.5%
教員	2	9.5%
インストラクター	9	42.9%
地域の方	0	0.0%
教員・インストラクター	6	28.6%
教員・地域の方	1	4.8%
教員・インストラクター・地域の方	0	0.0%
インストラクター・地域の方	1	4.8%
コロナで中止	1	4.8%
分からない	1	4.8%

表 14 高等学校におけるスキーの指導の内容

指導内容	人数	割合
ブーツでの歩き方	12	57.1%
スキーを抱えて歩く	6	28.6%
スキーを担いで歩く	6	28.6%
スキーの履き方	13	61.9%
スキーの外し方	13	61.9%
ストックの握り方	9	42.9%
片足スキーで歩く	7	33.3%
片足スキーで滑らせる	6	28.6%
スキーで歩く	12	57.1%
すり足で進む	11	52.4%
平地で推進滑走	11	52.4%
トップを支点に方向転換	10	47.6%
テールを支点に方向転換	7	33.3%
キックターン	6	28.6%
その場でハの字（ブルークスタンス）の練習	11	52.4%
階段登行	9	42.9%
開脚（V字）登行	10	47.6%
転び方・起き方	9	42.9%
直滑降	11	52.4%
ブルークファーレン	13	61.9%
直滑降からブルーク（ハの字）	12	57.1%
直滑降からブルークの連続	10	47.6%
ブルークファーレンから片足を開いて停止	10	47.6%
ブルークボーゲン	7	33.3%
ブルークボーゲン大回り	7	33.3%
ブルークボーゲン小回り	6	28.6%
滑走ブルーク	7	33.3%
斜滑降	7	33.3%
横滑り（斜め前）	3	14.3%
横滑り（真下）	4	19.0%
シュテムボーゲン	6	28.6%
シュテムターン	6	28.6%
パラレルターン大回り	4	19.0%
パラレルターン小回り	5	23.8%

4. 考察

本研究では、大学生を対象に、小学校、中学校、高等学校において冬季野外活動であるスキー教室・実習においてどのような授業が行われているのかをあきらかとすることを目的とし質問調査を行った。小学校、中学校、高等学校ともに青森県の者が最も多く、次いで北海道、岩手県、秋田県の順であり、回答者の 75% 以上を占めていた。

本研究の結果、小学校において、スキー教室・実習を実施している学校は、近郊にスキー場が存在する学校が多く見られた。青森県内においては、弘前市、黒石市、五所川原市、つがる市、野辺地町、十和田市、むつ市などにある小学校が実施していた。しかしながら、青森県内におけるスキー教室・実習の実施割合は 23.8% と北海道や岩手県と比較すると低い傾向にあった。このことは回答者の出身小学校の所在が県南地域で、太平洋に面した市や町の者が半分以上占めていたためではないかと考えられる。八戸市近郊は氷上競技が盛んな地域であり¹¹⁾、小学校の授業でスケートが行われているため¹²⁾、スキー教室・実習の実施割合が少なかった可能性がある。

中学校において、スキー教室・実習を実施している学校数は小学校の半分以下になっていた。中学校において、スキー教室・実習を実施している学校は北海道、青森県においては近郊にスキー場が存在する学校であった。青森県内においては弘前市、十和田市、おいらせ町の学校が実施していた。それに対し、埼玉県においては、県外で宿泊を伴ったスキー教室・実習が行われていた。

高等学校においてスキー教室・実習を実施している学校は 21 校であり、中学校の約倍となった。スキー教室・実習を実施している学校は北海道においては近郊にスキー場が存在する学校であった。青森県内においては弘前市の学校は近郊のスキー場で実施されていたが、八戸市内では県内のスキー場で実施する学校

と県外のスキー場で実施する学校があり、実施期間も日帰り、1泊、2泊と異なっていた。

小学校、中学校、高等学校ともにスキー教室・実習があった者は4名であり、そのうち3名が北海道の者であった。また、東北の各県では小学校から中学校にかけて実施校が減少しているのに対し、北海道では実施校が減少しなかった。北海道内においては学校教育基本計画の事務事業に、全小・中学校でスキー学習を実施することを明記している市¹³⁾やスキー学習の手引きを公開している市¹⁰⁾もあるため、回答者の地域ではスキー教室・実習の方法が確立している可能性がある。

スキー教室・実習の指導者の割合については、小学校、中学校、高等学校と上がるにつれて教員の割合が下がり、スキー場のインストラクターが指導を行う割合が増加していた。また、地域の方のかかわりも教員同様に減少していた。このことは、小学校、中学校、高等学校と宿泊を伴って実施する学校数が増加することによるものと考えられる。本研究の結果では、宿泊を伴う場合は県外にてスキー教室・実習が行われる傾向があった。宿泊を伴う場合は、生活指導や体調不良者が出た場合の対応など、引率教員の仕事が多岐にわたるため、指導できる教員が限られることが要因の1つではないかと考えられる。

スキー教室・実習の指導内容を見ると、小学校ではスキーの履き方、スキーの外し方、ストックの握り方、スキーを抱えて歩くといった基本的な用具の装着方法や、スキーで歩く、平地で推進滑走、階段登行といった移動方法、転び方・起き方といった安全面への注意点、プルークファーレンといった、スピードを制御し、ゆっくりと滑って止まるような内容であり、初心者が身に着けるべき基礎的な技術の習得が行われていることが分かる。このことは、小学校からスキーを始める者が多かったことが要因と考えられる。中学校では、小学校で行われていたスキーの履き方、スキーの外し方、階

段登行、転び方・起き方、プルークファーレンに加えて、その場でハの字(プルークスタンス)の練習や直滑降からプルーク(ハの字)、プルークファーレンから片足を開いて停止、プルークボーゲン大回り・小回りが行われていた。また、中学校でスキー教室・実習を実施したと回答した者11名のうち7名(63.6%)は小学校でもスキー教室・実習が行われていた。そのため、シュテムボーゲン、シュテムターン、パラレルターン大回り・小回りの割合が45.5%と、大きくなったと考えられる。高等学校においてはブーツでの歩き方、スキーの履き方、スキーの外し方、スキーで歩く、すり足で進む、平地で推進滑走、その場でハの字(プルークスタンス)の練習、直滑降、プルークファーレン、直滑降からプルーク(ハの字)が多く行われ、シュテムボーゲン、シュテムターン、パラレルターン大回り・小回りの割合が中学校と比較し、下がっていたが、行ったと回答した人数は大きく変化しなかった。シュテムターンやパラレルターンの相対的な割合が下がった要因としては、青森県内におけるスキー実施校が増加したためと考えられる。特に県南地域での増加が多く、高等学校で始めてスキーを実施したと回答した者が増えたため、シュテムターンやパラレルターンの割合が下がったと考えられる。

これらのことから、小学校、中学校、高等学校ともにスキーの脱着方法、スキーを履いた状態での移動方法や転び方・起き方、プルークボーゲンへの指導が展開されていることが分かった。また、スキー教室・実習においては、多くの場合、班別に行われることから、経験者にはパラレルターンへの指導といったより発展された内容が行われていると考えられる。

本研究においては、主に基礎的な内容について質問調査を行ったが、経験者に対する指導内容を明らかにするためには、より詳細な質問項目を作成して調査する必要がある。

参考文献

- 1) 文部科学省(2018) 小学校学習指導要領(平成 29 年告示). 東洋館出版社, 東京.
- 2) 文部科学省(2018) 小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説体育編. 東洋館出版社, 東京.
- 3) 文部科学省(2018) 中学校学習指導要領(平成 29 年告示), 東山書房, 京都.
- 4) 文部科学省(2018) 中学校学習指導要領(平成 29 年告示), 解説保健体育編, 東山書房, 京都.
- 5) 文部科学省(2018) 高等学校学習指導要領(平成 30 年告示), 東山書房, 京都.
- 6) 文部科学省(2018) 高等学校学習指導要領(平成 30 年告示), 解説保健体育編 体育編, 東山書房, 京都
- 7) 伊藤章一, 栗林徹(1988) 岩手県内の小学校における冬期体育 (スキー) 実施状況の調査. 岩手大学教育学部附属教育工学センター教育工学研, 10: 175-185
- 8) 三浦裕, 小林禎三, 速水修, 大塚美栄子, 古川善夫, 杉山喜一(1987) 寒冷地体育の現状と課題 (3) :北海道の小学校におけるスキー授業について. 北海道教育大学紀要. 第一部. C, 教育科学編, 38(1):201-216
- 9) 全日本スキー連盟 (2024) 日本スキー教程, 芸文社, 東京
- 10) 札幌市スキー学習の手引き
<https://www.city.sapporo.jp/sports/jigyou/ski-gakusyu-tebiki/ski-gakusyu-tebiki.html> (2024 年 12 月 12 日閲覧)
- 11) スポーツ庁 Web 広報マガジン DEPORTARE
<https://sports.go.jp/tag/business/flat-hachinohe.html> (2025 年 1 月 22 日閲覧)
- 12) TBS NEWS DIG
<https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/881117?display=1> (2025 年 1 月 22 日閲覧)
- 13) 第 2 期旭川市学校教育基本計画 (改訂版) 令和 6 年度 (2024 年度) 事務事業
<https://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/kurashi/218/266/269/p005103.html>
(2025 年 1 月 22 日閲覧)

執筆者紹介 (所属)

渡邊 陵由 八戸学院大学 健康医療学部 人間健康学科 教授
平塚 和也 八戸学院大学 健康医療学部 人間健康学科講師
工藤 祐太郎 八戸学院大学 健康医療学部 人間健康学科 講師
三本木 温 八戸学院大学 健康医療学部 人間健康学科 教授